

ファッションから見る 1980 年代における現代中国女性の 性・身体意識の変容

張 玲

ZHANG Ling

愛知大学国際中国学研究センター 客員研究員

【要旨】中華人民共和国建国初期、女性ファッションは黒、灰、青の単色、そして中性的であることを特徴としていたが、1980 年代から、服装の色は次第に豊富になり、女らしさが復活し、エロティシズムにまで急変した。本稿は雑誌『大衆電影』の表紙を分析材料に、このファッション変容を当時の中国社会の様々な出来事とのかかわりを通して追っていく中で、女性の身体・性意識の変化、つまり禁欲主義からエロティシズムへ向かっていったことを見いだした。その要因は第一に、トップダウン方式による社会意識の変容、すなわち女性の外見美と道徳との分立、外見美の評価体系の再構成である。第二に、社会環境の変化、例えば結婚難、女性就労問題、一人っ子政策の展開と女性作家の活躍である。そして第三に、西洋崇拜の風潮である。

【キーワード】中国女性、ファッション、身体意識、性意識

The Change of Chinese Women's Body Consciousness and Sexual Consciousness During 1980s from the Viewpoint of Their Fashion

Abstract : Until the 1970s, the trends of Chinese women's fashion were drab and sexless. But their fashion style has changed intensely from asceticism to eroticism during 1980s. This study explores how and why Chinese women changed their body consciousness and sexual consciousness by examining the change of women's fashion style during 1980s.

The article convinced that there are 3 factors influenced the change. The first is Transformation of social awareness conducted by the government from top down. The second is change in Chinese society such as difficulty of marriage, woman job shortage, one child policy and success of woman writer. The third is climate of western worship.

Keywords: Chinese women, fashion, body consciousness, sexual consciousness.

はじめに

本論文は、1980 年代における中国女性のファッション変容を、現代中国社会の様々な出来事とのかかわりを通して追っていく中で、女性の身体観、性意識の変容過程を考察する。

中華人民共和国の女性にとって、1980 年代は激動の時代であった。1978 年の改革開放政策の推進

および市場経済の導入は、人々の生活の豊かさの向上をもたらした一方で、社会の底流に流れる社会意識や価値観の激しい変化を引き起こした。

かつて中国女性は、「時代は変わった、男女はみな平等になった」というスローガンの下で国のために奉仕し、行為規範や労働、服装まで男性と同じであることを目指していたが、再び女性らしさを探求し、一度見失っていた自我を再建しようとしていた。

女性はスカートや化粧品、そして贅沢な生活を求めるようになった。それだけではなく、一度消滅した性市場が復活し、解放されたはずの女性が自ら売春をしたり、既婚富裕男性や高級官僚の愛人になる現象が目につくようになり、社会問題として関心を集めた。

いうまでもなく、諸外部条件の影響と共に、これらの問題は女性の身体・性意識にも根差している。現在の中国社会の価値観や“常識”等と見なされがちなものの多くが、実は1980年代に形成されたものである。したがって、女性の「現在」を理解するために、1980年代を振り返って見る必要がある。そこで、本稿は1980年代中国女性のファッションを通して、当時の女性の身体・性意識の変容や再建過程、およびその社会構造的な要因を明らかにすることを試みる。

ファッションは一見単純な個人行為であるが、社会行為でもあるという二重の性格を持つ。女性たちを惹きつける魅力は、時代が作り出したものであり、そこには慣習、礼儀作法の中で深く根差している社会の文化が存在する。他方では個人がいて、基本的にはその社会の慣習に従うが、時には違反したり変更または改革したりする。そして、それらの違反や変更が具現化してファッションの変化として現れる。女性の姿を決定するのは女性自身だけではなく、社会の中にある対抗関係、その浸透、交換、変容の戦いでもある。したがって、ファッションは「男女間の関係や性に関する社会の関わり の解明に最適な材料」(北村 2017:111-127)である。

本稿では、雑誌『大衆電影』の中に記録された女性のファッションを手がかりに、雑誌『中国婦女』、『中国青年報』や映画資料、小説等を参照しながら分析を進める。

『中国婦女』は1939年6月1日に抗日根拠地の延安で創刊され、中華全国婦女連合会に属する全国女性誌である。中華全国婦女連合会は中国(香港・マカオ・台湾以外)すべての省・県レベルの行政区、および4万余の郷レベルの行政機関に組織を設置し、中国で最も権威性ある政府系婦女組織であり、全国の女性に絶大な影響力を持っている。その機関誌である『中国婦女』は、中国で唯一の政府系女性誌として、イデオロギーの独断性や権力性を帯びることが指摘されている⁽¹⁾が、女性問題に関する中国共産党と政府の公式見解を分析する際欠かせない存在といわれている⁽²⁾。

『中国青年報』は中国共産主義青年団の中央機関の新聞として、1951年4月27日に創刊された。中国共産主義青年団は中国共産党の下部組織であり、党の基盤を固めて、若手エリートを育成する役割を果たしている。その機関紙である『中国青年報』は主に高校生、大学生、青年知識人を対象に編集され、中国共産党の方針政策そして正統なる社会イデオロギーを反映しているが、改革開放後市場経済の導入により、『中国青年報』も刊行部数を維持するため、若者に寄り添う姿勢を鮮明に出して、若者に支持されている。若者の潮流や考えを解説する手段としてもよく利用されて、中国の学術データベース「CNKI」においては、『中国青年報』と「青年」をキーワードとする論評はよく見られる。

『大衆電影』は1961年に映画監督張駿祥が資金を捻出し、中国人民解放軍上海市軍事管制委員会に属する文芸処により創刊され、映画や女優・俳優を紹介する専門誌である。文化大革命中停刊された

が、1979年に復刊され、3年後の1982年、その発行量は950万冊に達した。同年の娯楽誌の中で、最高の発行量を誇り、当時の娯楽誌の代表的な存在だといえよう。

「創刊以来、『大衆電影』は国家イデオロギーと大衆娯楽の狭間に置かれて、困難に直面する場面もよくあったが、娯楽が極端に欠如していた時代に、他の雑誌より新鮮な、生き生きとする情報を国民に提供し、現代中国の国民の日常生活に大きな影響を与えていた」(李道新 2009:225-237)。また「1980年代、映画は女性像の構築に、大きな役割を果たした……映画女優たちは注目され、スクリーンの内と外で、その身なりや振る舞いは一般女性に模倣された」(李子雲 2009: 214)。したがって、ファッション誌が十分に普及していなかった1980年代の女性のファッションを把握するには、『大衆電影』は適切な材料だといえるだろう。

雑誌の表紙は、読者に対する顔である。『大衆電影』の表紙(裏表紙)に載せられるのは主に女優や俳優のスナップ写真と映画のスチール写真であるが、本稿は女優のスナップ写真だけを抽出し、そこに1980年代における女性のファッション状況を見いだす。

本稿はまず1980年代の中国女性のファッションとその変化について考察する。次に、1980年代以前の中国社会における女性の身体・性に関する認識を概観し、その発展・変容を要約する。そして1980年代における中国女性のファッションの変化と、身体・性意識の変化を関連付けて考察し、表面に現れるファッションの変化の裏で中国女性は自分自身の身体と性をどのように認識したか、その認識にはどのような変化が生じたか、その変化の要因は何かについて分析する。最後では、これまでの分析を整理し、本稿の見解を提示する。

現代中国において、都市と農村の格差が存在しており、ファッションや意識の変化は主に都市から農村へと拡散していくため、本稿では、主に都市女性を観察対象とする。

I 1980年代における中国女性のファッション

1950年代から1970年代中期まで、中国の都市女性の服装の特徴はシンプルかつ単色で、「階級差のない服であると同時に、性差のない服でもあった」(ブリュノ・デュ・ロゼル 1995:336)。フランス人記者ソランジュ・ブランは当時中国人の服装を「青い蟻の海」と呼び、彼女が撮った写真(図1参照)でこの特徴はより鮮明に表現されている。



図1 単色・中性服装を着ている中国人

しかし1970年代末から徐々に女性の服装に変化が生じた。図2は1980～1983年にかけての『大衆電影』の表紙と裏表紙に掲載された女優のスナップ写真、図3は『中国婦女』の表紙に掲載された一般女性のスナップ写真である。これらの写真から見て分かるように、女性の服装は図1の「青い蟻の海」と呼ばれる藍、緑の極めて単調な色から豊富な色彩へと変化、ピンク、白、赤等の色が使われ、生き生きとした色彩が再び戻ってきた。また、編み物の上着が流行しており、女優はもちろん、一般庶民や子供も着用し、配色や刺繍等で服装をより華やかにする工夫も見られた。だが服装の様式や素材はまた質素で、クルーネックあるいはタートルネックのセーターが主な様式であり、スカートやワンピースの姿はなかった。素材もほぼ毛糸で、シルク、毛、皮革等の使用も見られなかった。



図2 1980～1983年『大衆電影』の表紙（裏表紙）の部分写真



図3 1979～1983年『中国婦女』の表紙の部分写真

しかしセーターの様式は次第に豊富となり、1985年では特に蝙蝠衫は大人気を得た。いわゆる蝙蝠衫はバットウイング・スリーブのセーターである。その襟の形は様々だが、袖はこうもりの翼のような形をしているため蝙蝠衫と名付けられた。図4の写真に写っている朱琳、張瑜、劉曉慶三人は1980年代中国で最も著名な女優である。この三人ともセーターを着用していた。朱琳、劉曉慶の上着の袖は翼のようにゆったりして、典型的な蝙蝠衫である。このトップ女優二人の服装からは、1985年に蝙蝠衫はファッションの最先端であったことがうかがえるだろう。



図4 朱琳、張瑜、劉曉慶（左から右へ）の写真

中華人民共和国建国初期において、セーターはもともとインナーとして使われたが、1980年代になると、以上の写真から見られるように、セーターはアウターとして着用することが流行であった。当時衣料品への需要ははるかにその生産・販売量を超えており、市販商品のファッション性も極めて貧しかった。そのような中で、人々にとって、手編みのものは自分の意志により設計・製作することが可能で、手頃なファッションアイテムであった。このため、編み物熱が沸き起こり、「編み物をしている女性はいたるところに見られた」（劉仰東 2004:279）。これはセーター流行の要因であると思われるが、李子雲等は、この「インナーをアウターとして着る」風潮を、ファッションの表現だけではなく、身体・意識への束縛からの解放に関する、女性の強い願望の表れだと述べている⁽³⁾。

色彩の復活の少し後に、スカートやワンピースに再び人気が集まった。図5は1981年、中国映画の第4回百花賞受賞者の写真である。写真から見られるように、女優たちはみなズボンをはいていた。服装の様式も極めて単純で、華やかさに欠けている。しかし3年後、1984年の第7回百花賞の受賞者の写真を見てみると（図6参照）、軍に所属している者以外、女優全員がスカートを着用していた。このころには、母親の手づくりスカートやワンピースを着る少女が街中至る所に見られ、スカートやワンピースを製作するための型紙もよく雑誌等に掲載されていた。市販のものも大人気で、1981年4月21日新聞紙『北京夕刊』には、あるワンピースが市場に投入された後すぐに売り切れてしまったことが報じられている。



図5 1981年第4回百花賞の受賞者



図6 1984年第7回百花賞の受賞者

少し時間が経つと、スカートやワンピースの素材や様式が豊富となり、1984年『大衆電影』第10期の裏表紙(図7)に見られるような、胸のふくらみを浮き上がらせるような、薄くて柔らかい生地と、透ける素材が使用されていた。スカートの丈も図6のような、一律に膝上ではなく、多様になり、デザインは非常にソフトになった。



図7 『大衆電影』第10期の裏表紙

喇叭裤とはベル・ボトム・パンタロンの中国名である。1960年代にパリのモード界で流行し始め、1970年代に欧米の若者の間で一世を風靡したが、中国では1980年代初期から流行し始めた。邵慧芳という女優の名はあまり知られていないが、彼女の喇叭裤姿(図8参照)は今でも多くの人々の心に残り、「モデルが周知されていない1980年において、彼女は初めて「身体美」を中国人に示した」と⁽⁴⁾評価されている。

とはいえ、1980年代前半までに、喇叭裤はお尻と太腿にフィットして身体のラインを浮き彫りにするものであったため、不良の「奇装異服」と見なされ、多くの学校はその着用を禁止した。

1983年からはミニスカート(中国語名:超短裙)が『大衆電影』の表紙でたびたび登場した(図9参照)。ミニスカートは1980年代中期から中国でブームを呼び起こしたが、露出度が高いゆえ、喇叭裤と同様に多くの学校で禁止されていた。⁽⁵⁾



図8 喇叭裤姿の邵慧芳



図9 ミニスカートの登場

1980年代前半における女性のファッションを概観してみると、一つの傾向が見て取れる。それは、女性らしさの復帰および身体の主張である。以上に見てきたように、当時のファッションアイテムにおいては、様式そのものは異なっても、女性の柔らかさ、女性の身体美を以前の時代より強く主張する特徴を共有していた。

しかし、1986年に入ると、画風は一変し、ファッションは明らかに露出度の高い、性的な誘惑を連想させるような方向に急激に進行していた。図10は、1986年『大衆電影』の表紙と裏表紙の一部である。この年から、服装の露出度が大幅に上昇し、肩をあらわにした服が初めて表紙の中に登場し、女性の身体の曲線を強調する表紙が増え、性的魅力はこれまでにないほどアピールされるようになった。



図10 1986年の表（裏）表紙

1986年以降、このような傾向はさらに進み、セクシュアリティを表現する写真の割合は大幅に増えた。肩や谷間の露出はもはや当然であり、ブラジャーがファッションアイテムとして表に出されることもあった。深紅の口紅、性的な挑発を思わせる表情、陶器のような肌に垂らしている長い髪（図

11 参照)、すべての表現が性の誘惑を連想させた。



図 11 セクシュアリティ表現の増加

図 12 は 1980 年と 1989 年の『大衆電影』で掲載された女優陳冲の写真である。上の写真は 1980 年、下の写真は 1989 年の撮影だが、1980 年では素朴な服装を着て、表情も純粋で、初々しい少女の様子が示されたが、1989 年になると、色気あふれる成熟した女性の姿が強調された。その変貌ぶりは一目瞭然である。図 10～12 を見て分かるように、1980 年代後半からは、女性の性的な身体が強調され、性的誘惑を赤裸々に表現するエロティシズムは一種の風潮となった。

言うまでもなく、この外見の変化の裏に潜んでいるのは、女性の身体・性意識の変化でもある。すなわち、1950 年代から 1970 年代中期まで、男女平等というスローガンの下で、女性の身体特徴を一生懸命隠しながら、行為規範や労働、服装まで男性と同じであることを目指していた中国女性は、1980 年代になると、改めて男女の性差を強調し、女性らしさへ回帰するにとどまらず、肉欲を連想させるような誘惑まで堂々と表現した。これは中国の伝統文化、そして中華人民共和国の社会主義イデオロギーの教えとは正反対の動きである。



図 12 陳冲の 1980 年と 1989 年の写真

II 女性の身体と性をめぐる認識

(1) 近代以前

中国古典文化の中で、女性の身体美は「品位や道徳や美の在り方としては重要でないもの、ひいてはつまらぬものときえ位置づけられた」（スーザン・マン 2015a:118）。張競によると、中国古典文学において、女性の身体美はよく花鳥風月等の自然物に例えられ、外形の正確な模写よりも、むしろ見る側の想像力を呼び起こす事に重点が置かれ、女性の身体、特に性的意味を持つ身体は重要視されな⁽⁶⁾かった。

絵画作品においても「20世紀にいたるまで、中国の画家や彫刻家は、裸体に関心を持たなかった」（スーザン・マン 2015b:132）。「女性を描く時に、ボディーラインを強調することは非常に珍しいようである。仕女画だけではなく、春宮図というポルノグラフィでさえ、このような特徴が見られる」（彭偉文 2008:53-72）。

なぜ古代中国の男性は、女性の身体に関心を向けなかったのだろうか。恐らく原因は二つある。第一に、美女は危険な存在で、警戒すべきだと考えられたからである。そのため、当時の男性は、簡単に女性の顔や身体等の外見美に惑わされてはいけなかった。

「紅顔禍水」という四字熟語で表されるように、中国の伝統文化の中で、美女は、その美しさゆえに危険な存在と見なされた。美女に惑わされて、大失敗を経験した男性の物語は数多く存在している。例えば、美しい妻の褒姒の笑顔を見ようとした西周幽王が、国を失い、周王朝をほころばせたという「烽火戏諸侯」は、最もよく知られている物語である。⁽⁷⁾白居易の「長恨歌」の中では、「春宵苦短日高起、從此君王不早朝」（春の宵はあまりに短く、日が高くなって起き出す。これより王は早朝の執政を止めてしまった）という名句があり、唐の玄宗皇帝は妃の楊玉環との情愛に溺れて、国家の統治を疎かにしたエピソードを描いている。また、中国で最も有名な小説『聊斎志異』の中でも、美人は常に狐や鬼の化身であり、男性を誘惑し食べ物にする物語が随所に見られる。このように、男性は女性の身体に対する興味を自制し、理性を保つべきであると考えられていた。

第二に、身体の機能は性の享楽ではなく、生殖と健康にあるとされたために、女性の身体美、すなわち性的魅力を持つ身体が重要視されなかったと考えられる。シャルル・メイエルによると、中国伝統文化においては、性行為の目的には二つある。一つは、家族の血統を存続させるための生殖で、もう一つは、健康のための、陰である女性と陽である男性のエネルギーの交換である。色欲を放縱することは、身の破滅につながるものであるから、特に慎むべきだとされた。例えば、古代中国の葉王と呼ばれた孫思邈は、『千金方』の中で年齢、性行為の回数と健康の関係について記している。⁽⁸⁾

このように当時支配的であった性意識は、節欲や慎色欲を説くものであり、男性には女性の身体に対して自制力を持つべきだと提唱された。そうした文化の影響により、少なくとも公的には、男性は女性の身体に興味を示さなかったことが、容易に理解できるだろう。

一方女性は、容姿よりも「三従四徳」を厳守する貞潔な女性であるべきと教えられた。「三従四徳」とは古代中国女性の基本的な行動規範であり、「男性本位の社会の中で、女性のあるべき姿を作っていた」（彭偉文 2008: 53-72）。三従とは、嫁ぐ前は父に、嫁いでからは夫に、夫亡き後は子に従うことであり、四徳とは、婦徳（婦人の守るべき道徳）、婦言（女らしいものの言い方）、婦容（女の身だ

しなみ)、婦功(機織りなどの女の仕事)のことである。四徳の中の婦容については、「必ずしも顔色美麗ならざるなり……塵穢を盥洗し、服飾鮮潔、沐浴するに時を以てし、身に垢つけ辱さず、是を婦容と謂ふ」(班昭『女誡』(山崎純一訳 1986: 93-94)とされる。⁽⁹⁾つまり、美しい外見、華美な服装は女性にとって必ずしも重要ではなかった。清潔であれば充分で、むしろ身体の曲線を見せ、妖しく媚態を作ることは道德違反とされ、するべきではないと教えられていた。

「不孝有三，无后为大」(親不孝には三つあり、跡継ぎのないことが最悪だ)のいうように、結婚後の女性は家族の血統を存続させるために、子供を多く生むべきであり、産めない、あるいは子どもの人数が少ない場合、夫には第二、第三の妻すなわち妾を迎える権利が認められ、妻はこれを我慢しなければならなかった。

また、貞操は女性にとって最も重要なものとされ、新婚の翌朝に新婦の処女の血が付いた布を家長に見せる風習があり、「餓死事小，失節事大」(餓死は小さいことであり、貞操を失くすのは大きなことである)、「一女不事二夫」(女性が夫を失くした場合には、他の男性と結婚しない)と提唱された。再婚する寡婦は軽蔑を受けるのに対し、夫を失っても死ぬまで貞節を守り再婚を拒む女性が、朝廷に金銭と記念の牌楼を与えられ表彰されたという例が、古代中国女性の教訓書とされた『列女伝』の中で多く記載されている。

このように女性に厳しいモラルを要求する時代には、ファッションも非常に保守的であった。女性の服装は「世界でもほとんど類がないほどの連続性があった。手足が隠れるほど丈が長く、ゆったりして、前に合わせるような位になっている服、袖幅は広く、ポケットを兼ねている」(シャルル・メイエール 1995: 230) (図 13 参照) 肌を見せることはほとんどなく、身体が存在、さらに性的な魅力(男性側から見れば性的な誘惑)を意識させないような意図が隠れている。



図 13 紀元前 221 年秦朝から 20 世紀初期 清朝の女性着装 (上から下へ)

もちろん、古代中国における男性による絶対支配の社会構造の中で、女性は自身の身体と性についての認識を雄弁に語ることはなく、記録されることもめったになかったゆえ、その認識は主に男性側の考えに集約されたことに留意すべきである。しかし、女性の身体・性意識は男性の意志の下にのみ存在し、決して能動的ではなかった事実も認めざるを得ない。

(2) 近代以後

清末以降、社会環境の変化および欧米の女性解放運動の影響で、女性に対する束縛は様々な角度から揺さぶりをかけられた。まずは女性解放の議論が社会の関心を集め、その中で教育上の男女平等、男女共学、纏足の廃止が求められた。そして女性に対する貞操論や一夫多妻制度も批判され、旧来の封建的家制度、三従四徳を打ち倒そうとして、多くの女性および知識人たちは新文化運動を起こした。女性教育の普及および新文化運動の展開を背景に、中国女性の身体・性意識に大きな変化が生じた。

自由恋愛、一夫一妻は都市知識青年の風潮となり、「強国保種」を目的とする優生学の視点から、纏足の廃止そして女性の身体の解放、もっと正確的にいえば、乳房の解放を目的とする“天乳運動”も展開された。

自然かつ健康的な身体美は流行となり、水泳、ダンス、乗馬、テニス等のスポーツをする女性を素材としたポスターが大量に作成され、水着姿の女子大生が堂々と雑誌の表紙を飾った（図14参照）。



図14 自然かつ健康的な身体美

このような女性解放の気運のもとで、身体は隠すべきものから見せるものになった。従来は男性の影に隠され、活動の場を家庭内に限られていた女性は、自身の存在、つまり男性とは平等でありながらも違う身体特徴を持つ人間であることを、服装に託し主張した。

まずは手と足を出している「文明新装」が一世を風靡した。そして1920年代からは、シンプルで動きやすいチャイナドレス（図15参照）が女性に歓迎された。



図15 文明新装（左）とチャイナドレス（右）

1920年代半ばからは、様々な西洋の流行や思想が全面的に中国に入り込み、生活のいたるところに浸透していた。西洋女性の化粧、真っ赤な唇、あらわになった胸と肩、つまり性的魅力を表現するファッションは、一時期に上海などの大都市で流行したが、抗日戦争の勃発と蒋介石政府の「新生活運動」により、すぐに消え去っていった。

一方、時代が経つにつれて、身体の解放と共に、女性の経済的独立も強調された。1932年8月7日付『申報』「女子解放万歳」(図16)では、上半身裸の女性が、「女子解放万歳」と叫びながらも、身に着けているパンツに「経済的には独立していない」という文字が書かれ、解放を目指す女性の矛盾した姿を皮肉っている。

そして日中戦争に続き、国共内戦の勃発により、国家存亡の危機意識が高まった。こうした中で、女性解放・男女平等の認識はやがて「男女は平等であるがゆえに、女性も男性と共に国家の興亡のため闘う必要があると訴えるようになり、ついには女性の自立と権利獲得よりも、まず国家の存亡の危機を救わなければならないと考えるに至った」(竹内 2007:65-66)。

このような女性の「真」の解放を求めて、一部の進歩女性は、いくつかの障害を乗り越え、中国共産党が延安で設立した新政権に身を投じた。彼女たちはこれまでの都市モダンガールとは一線を画し、別の視点で女性の身体と性を考えるようになった。

彼女たちは、男女恋愛、結婚・離婚の自由、そして一夫一妻の理想を新文化運動から継承する一方、「一般的に見れば、負けず嫌いであり、女性の弱さを一生懸命克服しようとしている。勉強にしても、体育や生産活動にしても、常に男性の基準に照準していた」(謝克 1946: 66)。



図16 女子解放万歳

彼女たちは意識的に女性らしさを払拭し、男性並みの身なりをしていた。身体は隠すべきものではないとの認識は維持されていたが、女性の身体曲線の表現は避けられた。

当時延安等の革命根拠地では、恋愛・結婚および離婚の自由が推奨されていたが、婚姻自由を口実(10)に、性行為の乱れや梅毒の蔓延等(11)が発生していた。このような事態を阻止するため、党は青年たち、特に党の幹部の予備軍である知識青年たちに恋愛・結婚の自由には制限があると教育した。当時の新四軍副軍長兼政治委員の項英は『我々の女戦士』(原題:我们的女战士)の中、次のように述べている。

男女関係は正常に保つべきである。我々の軍隊の中で、プチブルジョアの「ロマン行為」は決して発生させない。……抗戦第一、革命第一、これは我々男女戦士共通の信念である。……恋愛は仕事や軍隊の利益を邪魔しないことを前提としている。……ロマンを求める者は我々の軍隊中にあるべきではない、女性を尊重しない行為、女性に下心を持つことは犯罪と見なす。(方之光・龚雲 2000:408)

恋愛・結婚の自由に制限措置をとることもあった。党のエリートの育成を担っていた延安抗日大学では、1937年末に学生に対する恋愛・結婚の禁止令が公表された。それを違反し、学生と結婚した大学の幹部は毛沢東により解任された(12)。黄仁柯によると、革命グループの中で青年男女が党の許可なしで恋愛すると、党は思想闘争会議を開き、当事者同士が涙を流しながら懺悔するまで、このような行為をブルジョア行為であると厳しく批判した(13)。

党の教育と処罰措置を受け、延安の新政権に身を投じた女性は女性である前に、まずは兵士と労働者であることを強く認識していた。それゆえ、恋愛・結婚の自由さらに夫婦生活まで、党の管理に従った。党の紹介で半強制的に党の高級幹部と結婚させられた例は普遍で、朱徳と康克清、陳毅と張茜、劉少奇と王光美等は有名な例である。一部の高級幹部以外に、夫婦でも男女別に集団生活を送り、土曜日だけ「青年宿舎」という宿で一夜伴うことが一般化された(14)。

「性生活の目的は性の享楽ではなく、生殖にあるという伝統意識は延安でも継承された」(王向賢 2004: 61-83)。しかし、この時の生殖は家族繁栄のためではなく、労働者と革命者の再生産のためだとされた。私的な行為であるはずの生殖は、ナショナリズムの高揚のために活用された。

当時美德とされたのは、自己を抑圧して、人民や国家のために奉仕することである。この認識は1949年中華人民共和国成立後も継承されたが、1950年代後半からは、社会主義イデオロギーはさらに極端化して、個人の欲望に関連することはすべてブルジョア的なものと認識され、厳しく批判された。女性の性と身体も一切語られなくなっていた。例えば中国で最も使われた辞書『新華辞典』(1972年版)では、“娼、妓、嫖、尻”の字が削られた。中学生の教材『生理衛生』では、生殖器官の機能紹介を除いて、性に関する知識は殆ど書かれなかった(15)。

このように、文化大革命までは、中国の女性は禁欲主義の風潮の下に置かれ、身体および性への主張はほとんど行われなかった。しかし1980年代になると、女性は再び女性らしさの回帰を求めた。それだけにとどまらず、肉欲を連想させるような性的な誘惑まで堂々と表現した。言うまでもなく、これらの変化は中国女性の身体・性意識の根底の変容を示したが、このような変容はなぜ起きたのか。この変容過程において、旧観念がどのように打ち破られ、新しい認識がどのように構築されたかを明

白にすることが、中国女性の「今」を理解する基礎であるといえよう。次ではこれについて、詳しく分析する。

Ⅲ 禁欲主義への反動

先述したように、1950年代から文化大革命まで、中国の女性は禁欲主義の風潮の下にあり、身体および性への主張はほとんど行われなかったが、文化大革命の終結により、女性たちは「男女平等論」がもたらした混乱から脱け出して、女性らしさを求めるようになった。色彩の復活やスカートへの回帰、服装様式の多様化、柔らかい生地の使用などは、その表れだといえるだろう。1980年初期において、この動きは美への欲求の素直な表現であり、「春になると、万物は蘇るように、美への追求は禁じられないものだ」(李文斌 1979: 9)⁽¹⁶⁾と言われた。

徐華龍の記述によるとある女性は初の給料の大半を洋服に費やした。一万元さえあれば、上海のある繁華街南京路の店に置かれるおしゃれな服をすべて買いたいと宣言した女性も居た。⁽¹⁷⁾1984年に公開された映画『街中に赤いスカートは流行している』(原題: 街上流行紅裙子)の中で、労働模範(政府により承認された業務成績の優れた人物)である陶星兒は赤いスカートを着ると、とっても綺麗に見えるので、仕事の仲間たちに公園で「斬裙」をすると誘われた(図17参照)。「斬裙」とは、若い女性が自発的に公園で服装を競い合うことである。このエピソードは、当時の若い女性のファッションへの熱気を反映し、女性の美の探求が長い間抑圧されていたことへの強力な反動だといえるだろう。



図17 公園で「斬裙」をしている陶星兒

女性のみならず、男性もこれまで意識的に無視していた女性美を再評価しようとした。1979年の、画家袁運生による壁画「水かけ祭り—生命の賛歌」(原題:「泼水节—生命的賛歌」)(図18参照)は、北京の「首都空港」(原題: 首都机场)で展示された。その作品では沐浴している傣族(雲南省の少数民族)の三人の娘の裸体が描かれていた。展示されて1か月も経たないうちに、この壁画を見るために空港にやってくる観光客が後を絶たなかった。それと同時に、女性の裸体を公の場で表現してよいかどうかに関する論争も起こり、大きな反響を呼んだ。作者袁運生を痴漢として厳罰に処すべきとの声もあったが、袁は処罰されなかった。しかし、1982年以來この壁画は公衆の面前から遮断され、

公の場に再度姿を見せたのは8年後の1990年であった。

一方、女性らしさを求めてお洒落する女性も挫折を味わった。「お洒落は思想の不健康の表現だ」という理由で上司や周りに非難されたケースが、新聞や雑誌に頻繁に掲載された。例えばある女性幹部は、インタビューされた時に記者にこう述べている。「私が経験した挫折は全部お洒落に起因していた。大学時代ではスカートをはくことで、党支部の書記を担っているのに、なぜ率先してスカートを着用するかと責められた。局長として抜擢された時も、この人はお洒落が好きだから、勤勉に仕事できるのかと疑われた⁽¹⁸⁾」。このような記事は他の雑誌や新聞でも見られた。



図18 「水かけ祭り—生命の賛歌」

この中でも特に興味深いのは、雑誌『中国婦女』（1984年第1期）に掲載された「おしゃれは思想不健康を意味しますか？」と題する投書である。その内容は以下のようなものであった。

私たちは20代の若者で、喇叭裤もミニスカートも着用していません。夏に流行のスカート（袖も衿もある）を着たところ、上司および周りにファッションを追いかけるのは思想不健康の表現だと批判されました。果たして、ファッションを追求するのは、思想的な不健康を意味しますか？

この投書に対し、編集者は次のように回答した。

ファッションやお洒落することを、一律にブルジョア的な生活スタイル、思想不健康の表現だと非難することは、妥当ではない。しかし、“自然美”“曲線美”を追求するため、露出度の高い服装（袒胸露背）の「奇装异服」を着たり、求めたりする行為に対して、私たちは彼らを助ける必要がある。つまり彼らに、真の美は外見の美ではなく、心の美しさであることを教えなければならない。

この読者からの投書および回答から見てわかるように、1980年代中期までに、女性のファッション、美への追求に一定の寛容さを見せたとはいえ、服装には善悪のラベルが貼られており、悪趣味を意味する「奇装异服」は依然批判されていた。「奇装异服」の定義は明確にされていないものの、1964年6月10日の『羊城晚报』では、「奇装异服とは何」との文章を公表している。それによると奇装异服とは、女性の谷間を見せる服、肩を露わにして袖がない服、お尻にフィットしているスカート、ベルト付きで乳房を強調するような服等だと主張されている。文化大革命中、このような認識は紅衛兵の「破四旧」運動（古い思想・文化・風俗・習慣の打破）により強制的に普及された。1980年代前半まで、喇叭裤、ミニスカート等の「奇装异服」への禁止令は、当時中国社会では身体の表現自由にタブーが

あり、性の誘惑を感じさせてはいけないという考えが依然根強く中国社会に存在していることを示していた。

しかし1980年代後半になると、トップダウン方式による社会意識の変革が図られて、外見美と道德の分立、外見美への評価体系の再構築により、奇装異服へのタブーが打ち破られた。そして社会環境も変化し、美しい身体の価値の再発見を促した。それと同時に、西洋崇拜は一種の風潮となり、セクシーな魅力に溢れた海外のスーパースターに憧れて、女性たちはついに堂々と豊かな胸、くびれたウエスト、美しい身体のラインを表現し、エロティシズムは一種の美として広く受容された。

IV 社会意識の変革

(1) 外見美と道德の分立

かつては、美は道德と密接に結びついた形で語られていた。三従四徳で見られるように、良家の女性は外見の美よりは内面の徳を重視すべきであり、外見美の追求は常に腐敗墮落の前触れだと教えられた。男も外見だけで女を選んでしまうと、不幸な結末を迎える教訓が数多く存在する。1980年代初期までは、このような思想は依然根強く存在していた。

例えば『中国婦女』(1980年第6期)の文章「她俩谁美」では、バスに乗っている二人の女性を対照的に描写している。一人は美女で、年寄りや子供に席を譲らず、周りに嫌われた。もう一人は平凡な女性だが、困っている客を助けることで、みなに評価された。最後に作者は「人間の美は顔、服装、髪形によるものではなく、心によるものだ。人間は内面の美がなければ、美しい外見でも嫌われる」と結論付けた。同号の「美に関する感想」(「关于美的碎语」)の中では、「女性のお洒落は生活の良さを示しているが、内在的徳を無視し、外見美だけを追求してはいけない……真の美は理想、道德の美、勤勉の美である。これらの美は服装の美、体形の美、個人家庭の美よりずっと重要である」と明快に宣言した。『中国婦女』(1980年第1期)の「少女失足恨」の文章の中で、ある罪を犯した女性はこう嘆いた。「もし私がファッションを追いかけなかったら、もし両親が私に服を買うお金を沢山くれなかったら、私はこんなに早く犯罪の泥沼に陥らなかった」。このように、1980年代初期では、美と道德を結びつけて、外見より徳の方が重要だと一般的に語られてきた。

一方で、外見美を道德から分離する動きも見られ、服装を道德の物差しとしてはいけないとする声⁽¹⁹⁾が聞こえるようになった。例えば「奇装異服」と見なされた喇叭褲について、著名作家丁玲は「喇叭褲を穿くことは罪ではない……私たちの服装は殆ど青、黒、灰三色であり、確かに面白くない。若者たちは個性がある。着装の自由もある。服装で若者の道德を評価することは、私は適切ではないと思う」と擁護の発言をした。

さらに中国共産党で最も権威ある新聞紙『人民日報』は1981年8月23日に評論文「奇装異服と社会安全の破壊を同一視すべきではない」(原題:不要把穿“奇装异服”与破坏治安混同起来)を公表、「一部の幹部、特に年長者は、よく一般化されていない服装を着ることを不道德だと認識している。確かに犯罪者の多くは奇装異服を着用しているが、奇装異服を着ているものがみんな犯罪者だと同一視すべきではない。……私たちは奇装異服を推奨しないが、若者の服装に対する干渉は賛成しない」と強調した。

それと同時に、雑誌や新聞紙等においては、服装や化粧等に関するコラムが随所に見られようになり、外見美は道徳と分離され、一種の知識として紹介されていた。例えば『中国婦女』は、「服装芸術」「美と生活」等のコラムを設け、「服飾を飾るコツ」(原題:怎样佩戴服饰)「あなたの体型をより美しくするため」「自然な化粧」「美容知識講座シリーズ」等を掲載し、着装や化粧、そして体形をより美しく見せるための方法を紹介した。また読者を対象とする「服装デザインコンテスト」も複数回開催され、大都市に限らず、貴州省などの遠隔地からの参加者も多く、大きな反響を呼んだ。⁽²⁰⁾



図19 美しい姿勢および化粧の方法

このように、女性の美しさは直接に視覚に訴えるものへと転換し、外見美は道徳とは独立した価値だという認識が次第に受容された。1985年2月に中国で初の美人コンテストが広州で行われた。3年後の1988年4月9日に北京で“美人コンテスト”を行うことが国营通信社である新華社にも報道された。その後中国全土で“美人コンテスト”が盛んに開催されるようになった。この風潮を疑問視する評論例えば「中国“美人コンテスト”の本質を見て取る」(原題:中国選美透视)、「美女は多すぎる——美人コンテスト氾濫への感想」(原題:美女成灾——選美泛滥之惑)⁽²¹⁾等もあったが、選美に対する熱気は一向に収まらず、「一日に七つの美人コンテストが行われた」⁽²²⁾ことも報じられた。

(2) 外見美への評価体系の再構築

外見美と道徳を分離させるだけではなく、外見美への評価体系も二つの側面から再構築された。すなわち第一に、美の追求の持つ意味は、ブルジョア生活方式への墮落から、社会主義的な優越性への転換、第二に、ファッションへの追求は経済発展に貢献するとの認識への転換である。

文化大革命により硬直化した社会主義イデオロギーを修正するため、1970年代末から、思想解放運動が中国全土で広範に展開された。この中で、「奇装異服」および「ブルジョアの生活方式」は重要な命題としてよく議論され、再評価されていた。例えば、雑誌『文化と生活』(1980年第1期)では評論文「服装の“奇”“異”に関する議論」(原題:服装“奇”“異”小議)が掲載され、人民の生活をより豊かにするため、外国のファッションを導入しても問題にならないと主張された。1981年8月23日『人民日報』は「奇装異服と社会治安の破壊を同一視してはいけない」(原題:不要把穿“奇装异服”与破坏治安混同起来)、1983年11月17日『中国青年報』では「汚染を清掃し、生活をきれいにする」(原題:汚染要清除、生活要美化)という文章が掲載され、女性がファッションを追求することは、社会主義の精神汚染ではない、禁止すべきではないと語られた。

さらに1983年12月13日、中共中央総書記であり当時党の最高指導者であった胡耀邦は、各省市自治区团委書記会議に出席した際、次のように明言した。

現在、私たちの服装スタイルはよくない。いつも同じ様式、同じ色だからだ。服装に「奇装異服」のラベルを貼ることはよいことではない。中国の女性幹部はズボンしかはかない。外国人から見れば、これも一種の「奇装異服」である。

この発言を受け、1984年10月に淄博市を視察した紡織工業部副部長の呉文英は、自ら体のラインにフィットさせる黄金色のスカートををはき、「より良い、より美しい服装を着用する希望は党と国务院により支持されている。国民をより綺麗にすることは、中国の紡織工業の義務と責任である」と宣言した。⁽²³⁾

他方、「生活方式」に関する議論は政府系マスメディアにより広範に行われた。例えば『中国婦女』は1984年第7期から半年かけて「婦女と社会主義生活方式問題」に関する一連の議論を、『中国青年報』は1985年1月から4月まで「青年と現代生活方式問題討論」を連続的に展開した。こうした一連の議論により、生活の質すなわちより良い衣食住等を求めることは社会主義文明あるいは優越性の体现であり、国家の経済発展にも貢献するとの考えが定着した。

外見の美は国家レベルの意義を持つだけでなく、個人にも良いことをもたらすとの宣伝も見られた。例えば『中国婦女』(1985年第3期)における写真小説「賢内助」(図20参照)では、ある屋台で洋服を販売しているカップルの物語が語られている。ある日、女性は非常に高い毛皮服を買い、それを着ていつものように仕事をしていたが、毛皮の値段があまりにも高いため、パートナーの男性は贅沢だと少々不快に思った。ところが、彼女の美しい姿を見て客が大勢寄ってきて、彼女と同じような服装を求めた。彼らはこの毛皮服の販売で大儲けし、男性は彼女のことを賢内助(賢妻良母)だと認めた。



図20 写真小説「賢内助」

V 身体価値の再発見

先述のように、近代以前のほとんどの時代を通して、中国の女性は身体の露出を抑圧されてきた。妓女以外の良家の女性にとって、生殖は身体の機能の中心的な役割とされており、男性に性的な誘惑を感じさせてはいけないという認識に基づくものだった。

清末以降、女性解放運動の展開、女子教育の普及、女性の社会進出などにより、女性の手足が衣服から出せるようになり、短期間ではあるが、女性特有のS字型の身体的な曲線を表現することも許された。しかし、胸や太腿、ウエスト等を露出し、身体の官能性を示すことは依然として厳しく禁じられていた。1970年代末から1980年代初期にかけて、喇叭褲、ミニスカート、身体のラインにフィットする服装の禁止、そして先に述べた裸体画に関するエピソードは、このような社会通念の存在を表していた。

しかし1980年代になると、女性は身体美への欲求を急速に加速していく。この背景には、当時の結婚難、女子の就労問題、そして一人っ子政策の展開、女性作家の活躍などが挙げられる。

『中国婦女』(1984年第9期)において、国家指導者、前婦連副主席である郝建秀の文章「適齡期過ぎた青年の結婚問題に注目しよう」(原題:大家都来关心大年龄青年的婚姻问题)が掲載され、中国における「大男大女」と呼ばれる結婚適齡期を過ぎた独身男女の結婚問題が、社会問題として取り上げられている。いわゆる「大男大女」は、主に1950年代に生まれて、文化大革命という10年にわたる大動乱に翻弄され、恋愛や結婚を滞らせた世代である。

結婚問題を解決しなければ、個人が不安定になりやすく、社会の安定にも負の影響を与える。中国の場合、特に1980年代までは、結婚は個人の待遇に繋がることが多く、独身者は常に不利な位置に置かれていた。例えば住居に関して、職場からの割り当ては家族優先で、独身者が住居をもらえる可能性は非常に低かった。また「男大当婚、女大当嫁」という伝統的な結婚観が根強く存在する社会において、結婚適齡期の独身者に対する家族や社会からの圧力も強かった。

『中国婦女』(1985年第9期)「秘密」という文章では、周囲の結婚紹介話から逃げるため、休日になるとデートに出かけるように見せかけ、図書館で時間をつぶしていたという独身女性のエピソードが紹介されている。このように、独身者が肩身の狭い思いをする社会構造の中で、結婚はもはや必須の選択となってきた。

しかし結婚の話になると、当時は女性の容姿が非常に重視されていた。その原因は、『中国婦女』(1984年第7期)「談择偶」というコラムに掲載されたある投書からうかがうことができる。その内容は次のようなものである。

私は男子大学生で、自分の立場から男性のパートナーを選ぶ基準について議論したい。私は周りのクラスメートとよくこの話題について議論した。美しい、優しい、優雅で教養ある女性はみんなに求められている。女性の美貌と優雅は何より直接的に男子の心を動かす。美貌のパートナーを持つことは、自慢できることだ。もちろん女性の内在的な美も重要であるが、今若い男女のための社交の場が少ないので、相手を深く知ることができず、パートナーを選ぶ際に、女性の外見と年齢は最も重要な要素になった。(「私のパートナー選びの基準」より)

結局、女性はきれいなものが勝つという社会風潮が生じた。こうした中で、外見美への関心が増大する一方であることも不思議ではないだろう。顔が美しくない場合は、姿勢と体形の良さによって補填する必要があった。簡単に変えられない顔よりは、女性たちの関心は自然と身体へと向かった。

21世紀初頭、外見が原因で内定が取り消されたケースは中国全土で頻発していた。例えば2003年2月、深圳市のある女性が国税局公務員の試験に合格したが、身長が1 m 50cmに満たなかったために採用されなかった。2006年に容姿がよろしくないとの理由で内定が取り消された“秋子”という女性が訴訟を起こして、全国から注目を集めた。海外のマスメディアも中国の人事雇用における外見差別問題に関心を寄せた。⁽²⁴⁾問題を改善するため、中国政法大学は大規模調査を行い、2007年にその調査成果である『中国の就業差別現状及び対策』（原題：中国就业歧视现状和反歧视对策）、『海外での就業差別反対の制度およびその実践』（原題：海外反就业歧视制度与实践）という2冊の著書を刊行した。

人事雇用における外見差別問題は21世紀初頭から表面化した⁽²⁵⁾が、周偉によると、1990年代にこの問題は既に普遍化していた。その発端は1980年代にあると考えられる。

1978年の改革開放政策は直ちに中国の経済と労働制度に大きな変革をもたらした。勤怠を問わない賃金平均主義の「大鍋飯」は次第に解消され、工場長責任制、経営権の請負、「工場破産法」の執行等の改革が次々と打ち出された。効率あるいは経済成長の優先が定式化されている環境の中で、かつて「男にできることは女にもできる」という思想の下で、工業部門で男性と同様に重体力労働を行った女性は必要とされなくなった。女性の多くはレイオフされ、「下崗女工」が社会問題として関心を集めた。『中国婦女』は「1988年——女性の活路は？」をテーマに特別コラムを設けて、1988年1月から1年間にわたり、女性の就労問題を様々な視点で議論したが、体力的に衰えている女性は率先してリストラされたことも否定できない事実だった。

それと同時に、「労働合同制」制度の推進により、終身雇用から期限付契約雇用に変わり、企業は人事採用自主権を握った。女性労働者を雇用する際に、女性の容姿も常に評価の重要基準となり、求人広告に“身材高挑”、“形象好”、“氣質佳”はもはや常套句であり、女性の外見美を重視する社会風潮に拍車を掛けた。

また市場経済の推進、商業文化の繁栄は、服装モデル、公关小姐（企業の広報や渉外を担当している若い女性）等、外見を重んじる職業を生み出した。それらは一般の職業よりも華やかで、給料もよいということで直ちに女性の理想的な就職先となった。1983年6月に『北京晩報』は23人のモデル候補者を募集する広告を掲載し、3日間で800人以上の応募者が殺到した。⁽²⁶⁾1980年代後半からは、モデルの活躍する姿がマスコミにより好意的に宣伝され、国際的なモデルコンテストでチャンピオンを獲得した彭莉は、国に榮譽をもたらした英雄として謳えられた。こうした要因により、美しい身体は仕事と直接に繋がり、チャンスをつかむ道具であり、人々を魅了する手段であるとの認識が普及した。

さらに一人っ子政策の展開と女性作家の活躍も、女性の身体意識の変容に拍車をかけた。1949年中華人民共和国建国当初、中国共産党の指導部の中では、労働力こそが生産の基盤とされ、人口抑制にはあまり関心が向けられなかった。1957年の反右派闘争で、人口抑制を提唱した経済学者馬寅初が厳しく批判され、人口抑制説は一層タブー視された。しかし1978年以後、国家経済の発展が人口の増加に追いつかないという危機感から、「一人っ子政策」が基本国策として執行された。この政策の核心は、一組の夫婦は一人の子しか産むことが許されないことである。二人以上を生む場合には、かなり高額な「計画出産超過費」を国に納めなければならないが、さらに悪質と認定される場合には、職場を辞めさせられるケースもしばしば見られた。

一人っ子政策は国家による出産の管理であり、個人への権利の侵害だと国際社会で厳しく批判されたが、「多子多福」という伝統文化の中、女性を生殖、育児の重圧から解放する利点も忘れてはいけない。性行為における快楽の要素が増大し、身体の官能性への意識を喚起する要因の一つと考えられる。市場の需要があるからこそ、1985年に乳房を塑形する商品は市場に出て（図21参照）、1989年に「夫妻運動快楽器」という性用品の広告も見られた⁽²⁷⁾。

また1980年代における女性作家の活躍も、女性の身体・性意識の変容に大きな影響を与えた。五四運動に続き、1970年代末からは、女性作家が次々と小説を発表し、声高く性、道徳、ジェンダーに関する議論に参加し、女性の内なる声を表明した。

例えば張潔は1979年末に『愛、忘れられないものだ』（原題：愛、是不能忘记的）を発表した。そこに登場する女性作家鍾雨は、離婚後娘と二人で生活していたが、既婚者のある男性と知り合い、道徳的問題があると認識しながらも、二人はやがて忘れられない恋をした。この小説の中で、作者張潔は結婚と愛情との矛盾、道徳と人間の欲求との衝突を生々しく描き、それまで依拠してきた家庭倫理の根底に疑問を呈した。

1980年、遇羅錦は自伝的小説『冬の童話』を発表し、愛とは「感情的、知的、そして肉体の親密さ」を兼ね備えたものだと主張し、性行為を赤裸々に描いた。また鉄凝は『綿積み』で男性の女性への性的支配欲を暴きだし、王安憶は、女性と性愛をテーマに恋の三部作『荒山の恋』『小城の恋』『錦繡谷の恋』を発表し、大きな反響を引き起こした。これらの作品には様々な意見があるとはいえ、そこに見られる女性の欲望表現は、いずれも一種の新しい価値観の表出として社会に大きなインパクトを与えた。そしてこの魂の叫びはまた、多くの女性に身体・性の自意識を覚醒させた。



図21 乳房を塑形する商品の広告

VI 西洋崇拝の風潮

上述したように、1980年代に起きた価値観および外部環境の変化は、中国女性の身体・性意識に大きな変化をもたらした。女性が男性とは異なる身体を持つこと、性的欲望があることを、女性自身が能動的に表現するようになった。しかしこの表現は、明らかに露出度の高い欧米風の肉欲の女性像をモデルとしている。その背後には当時の西洋崇拝の風潮が作用している。

十年浩劫といわれる文化大革命の激動により、多くの中国人はこれまで身をささげてきた社会主義理念に疑問を持ち、人生の目的とその価値を再考するようになった。その代表的な出来事が、1980年に雑誌『中国青年』で展開された「人生の意義をめぐる論争」である。

『中国青年』（1980年第5期）に「人生の道よ、どうして歩むほどに狭くなるのか」（原題：人生的路啊、怎么越走越窄）と題する投書が公表された。そこでは理想と現実の乖離に幻滅と喪失感が表明されたうえで、個人の利益は集団利益より重要だと初めて主張された。この投書は大きな反応を呼び、半年にわたり6万人がこの論争に参加した。

社会主義イデオロギー教育により、国家と民族に対する関心を再び呼び覚まそうと図られたが、経済発展と対外開放の推進につれて、西洋文化および欧米諸国の技術や経済力、生活水準等を目の当たりにしたことで、西洋崇拜の風潮が次第に中国国民の中で広がっていった。

外国製用品・外国ファッションは大人気で、飛ぶように売れた。『中国婦女』（1990年第7期）では、「中国における西洋産品消費の記録」（原題：中国“洋消費”备忘录）という評論文が掲載され、海外商品が中国に溢れている状況に懸念が表明された。

欧米先進国への留学ブームが起り、英語能力テスト TOEFL を受験するために、1986年に北京だけで千人以上の申込者が徹夜の行列を作った。⁽²⁸⁾中国本土の有名女優さえ次々と海外へ流出し、社会問題として関心を集めた。⁽²⁹⁾

このような西洋崇拜風潮に迎合するように、海外中産階級の生活スタイルや海外のスターに関する紹介は娯楽誌の中で大幅に増加された。例えば『大衆電影』では、1985年から「世界映画フォーラム」（原題：世界影坛）「香港台湾のページ」（原名：港台之页）、「忘れられないハリウッド」（原題：难忘的好莱坞）（図22参照）のコラムを設置し、海外および香港台湾のスターの華麗なる生活やそのファッション等を定期的に紹介した。



図22 忘れられないハリウッド

雑誌に掲載された海外スターの写真も1～2ページから3～5ページに増え、裏表紙ではほぼ海外女優の写真を使っていた。写真で紹介された海外女優の多くは露出度の高い服装を着用し、その色気や性的な身体を強調していた（図23参照）。1950年代のセックスシンボルの一人であるマリリン・モンローも魅力的な女性として掲載された（図24参照）。



図23 あふれる海外のスター



図24 魅力的なマリリン・モンロー

「1980年代において、『大衆電影』は中国で最も流行な雑誌であり、雑誌に掲載しているスターの写真を見本に、若者たちはこれを真似していた」（尹丛丛 2014:40-42）。このように、海外から大量に流れ込んでいた性的な誘惑を強調する欧米風の女性像は、『大衆電影』を代表とする娯楽雑誌を経由して、多くの女性に影響を与えた。

これに関して、警戒の声、例えば「表紙の効果——脱ぐ、あるいは脱がない」（原題：封面照效应：脱，还是不脱⁽³⁰⁾）などもあったが、間もなく時代は1990年代に入り、「ポップカルチャーが市場に溢れ…広告が西洋と結びついて大幅に影響を与え始めた」（王瑾 2011:46-47）。西洋から大量に押し寄せてくる商品や文化は、もはや抵抗できない勢いで、中国女性たちの美意識を欧米風に変えていく。身体の露出によりエロティシズムを表現することは一種の美として広く受容された。

結びに代えて

中国何千年の歴史の中で、中国女性の身体はほとんど服に覆い隠されていた。それは、女性は夫のために貞操を守る義務を持ち、性的な魅力を外面に出すべきではないとの考えに基づくものであった。

清末以降、女性解放運動の展開、女子教育の普及、女性の社会進出の増加などにより、中国女性の身

体・性意識に大きな変化が生じた。自由恋愛、一夫一妻が都市知識青年の風潮となり、女性は纏足・束胸の塑形から解放され、自然の身体美が流行し、女性の身体は隠すべきものから見せるものになった。

一方、中国共産党政権の下で、別の視点で女性の身体・性を見つめる「時代女性」も存在していた。彼女たちは自身のことを、女性である前に、まずは国家に奉仕する兵士と労働者であることを強く認識し、恋愛・結婚の自由、さらに夫婦生活まで党の管理に託した。彼女たちは意識的に女性らしさを払拭し、身体を覆い隠していなかったものの、性的な特徴を持つ身体への表現は抹消された。

中華人民共和国成立後、このような認識が主流となり、文化大革命中にさらに極端になっていった。女性の身体・性に関することは、すべて腐敗墮落、色欲の証となり、タブー視された。このため1970年代中期まで、中国女性の服装の特徴は、単色で、胸やお尻のリアルな曲線から離れて、性的なものをすっきり覆い隠そうとするものだった。

しかし1980年代になると、女性は身体美への欲求を加速させていく。胸や太腿、お尻等を露出し、身体の官能性を示すようなエロティシズムにまで至った。本稿は、1980年代における中国女性のファッションの変容を現代中国社会の様々な出来事とのかかわりを通して追っていく中で、女性の身体観、性意識の変容過程を考察し、その要因の析出を試みた。

1980年代前半までに見られた、女性のファッションにおける色彩の復活、スカートへの回帰、服装様式の多様化、柔らかい生地の使用等は、長い間禁欲主義の風潮の下に置かれた女性たちの美への欲望の反動であった。さらに1980年代後半になると、時代の女性像は明らかに西洋風の性的な誘惑を連想させるものとなった。その要因は第一に社会意識の変革、第二に身体価値の再発見、第三に西洋崇拜の風潮に求められると、本稿は主張した。

従来では、外見の美はいつも内的美すなわち道徳と結びついて語られていたが、1980年代初期からは若者のみならず、指導部からも服装等の外見でその人の道徳水準を判断すべきではないとの意見が出てきた。また雑誌や新聞等においても、服装や化粧等に関する知識紹介が随所に見られ、女性の美しさは直接に視覚に訴えるものへと転換し、外見美は道徳とは独立した価値であるとの認識の下地を作った。

それだけではなく、外見美への評価体系も両側面から再構築された。第一に、美への追求の持つ意味が、ブルジョア生活方式への墮落から、社会主義的な優越性へと転換した。第二に、ファッションへの追求が経済発展に貢献するという認識への転換であった。

トップダウン方式によって社会意識の転換が図られると同時に、社会環境の変化、つまり結婚難、女性就労問題、一人っ子政策の展開、そして女性作家の活躍が、女性の身体・性意識の変容を促した。「強国保種」の大義名分で生殖に重要性を置いていた女性の身体は、いくつかの新しい価値が見いだされ、性の快楽を享受する肉体、仕事やチャンスをもたらす道具、他人を魅了する手段として認識されるようになった。

こうした事情により、身体美はこれまでになく重要視されるようになった。このような社会的な風潮は西洋崇拜風潮と合流して、西洋のスターたちを見本に、妖艶でエロティックな女らしさが作り上げられた。これは過去にイメージされた女らしさを上書きするものであり、女性の新しい身体・性意識を具現化していたといえよう。

謝辞：本稿執筆にあたり、匿名で査読していただいた2名の先生方から大変貴重なご意見、ご示唆を賜り心より感謝申し上げます。

注

- (1) 屈雅君 (2016) 「現代中国における三種の女性話語 (ディスコース) 小浜正子、秋山洋子編『現代中国のジェンダー・ポリティクス』勉誠出版:145-158
- (2) 赵博 (2016) 「中国女性形象研究现状——以官方女性刊物『中国婦女』為例」『現代交際』2016年第12期
- (3) 李子雲 (2009) 『チャイナ・ガールの1世紀』三元社
- (4) 邵慧芳に関する評論は次のネット参照
<https://kknews.cc/zh-cn/entertainment/35m5pa.html> 2018年4月21日アクセス
- (5) 例えば 1980年広東省教育学会思想調査組は学生の喇叭褲着用行為をブルジョア的な生活を求める行為として厳しく批判していた。調査組により公開された文章「今青少年の思想政治教育問題」(原題: 当前青少年思想政治教育問題)の中で、学校の思想政治教育向上の証として、喇叭褲の着用の減少が取り上げられている。1982年に上海師範学院は『学生儀容、マナーの5項規定』を公表し、その第一条で「服装は清潔、適切でなければならない。奇装異服(例えば喇叭褲、ミニスカート、タイトフィット、女性の胸と肩をあらわにした服装)は厳禁」と定めた。
- (6) 張競 (2001) 『美女とは何か——日中美人の文化史』晶文社
- (7) 西周時代の最後の王である幽王は、美しい妻の褒姒を笑わせるため、度々たむむれで烽火をあげ諸侯を召集した。烽火は元々外敵が迫る時、諸侯に緊急事態であることを知らせ、救助を要請する方法である。諸侯たちは烽火を見て息を切らせてやってくるにもかかわらず、敵の姿が見えない。呆然としている様子を褒姒に見せることで幽王は妻を笑わせた。このような召集が繰り返されると、諸侯たちはそれにこたえて馳せ参じるのをやめてしまった。そして外敵が本当にやってきたときに、幽王は援助してもらえず、攻撃に倒れた。
- (8) シャルル・メイエル (1995) 『中国女性の歴史』辻由美訳 白水社
- (9) 三従四徳の訳は山崎純一によるものである。
 山崎純一 (1986) 『教育からみた中国女性史資料の研究』明治書院
- (10) 朱鴻召 (2007) 『延安——日常生活の歴史 1937-1947』広西師範大学出版社: 241
 注 (8) シャルル・メイエル、前掲書: 268
- (11) 高橋伸夫 (2006) 『党と農民——中国農民革命の再検討』研文出版: 79
- (12) 莫文驊 (1996) 『莫文驊回憶錄』解放军出版社: 350
- (13) 黄仁柯 (2001) 『魯芸人——紅色芸術家們』中共中央党校出版社
- (14) 朱鴻召 (2007) 『延安——日常生活の歴史 1937-1947』広西師範大学出版社
- (15) 叶恭绍 (1983) 『周恩来関心性教育』科学普及出版社
- (16) 李文斌 (1979) 「満園春色関不住——看記録片《美的心願》隨筆」『大衆電影』1979年第9期: 9。文化大革命終結後、人々の服装特に女性の服装の変化を反映させるため、1979年中国中央テレビ局は映像資料『美への願望』(原題: 美的心願)を放送し、雑誌『大衆電影』1979年第9期はこの資料に関する評論文「満園春色関不住-看記録片《美的心願》隨筆」を掲載し、美への追求は禁じられないものだとして主張した。
- (17) 徐華龍 (2010) 『上海服装文化史』東方出版中心
- (18) 『中国青年報』1986年7月11日第3版の記事「私は私——河南商丘地区二輕局局長尚秀雲に関する記事」(原題: 我就是我一记河南商丘地区二轻局局长尚秀云)
- (19) 1979年第4次中華全国文学芸術工作者代表大会における丁玲の発言
- (20) 1984年からはファッションや、美容・姿勢の作法に関する文章が新聞雑誌で随所に見られるようになってきた。例えば『中国婦女』1984年第8期の「戚玉芳健美操图解」では、体型をよくするためのエアロビクスを

図版で紹介した。1985年第1期では「服飾を飾るコツ」、1985年第4期では「あなたの体型をより美しくなるため」を掲載した。また「美容知識講座シリーズ」も1985年第4期から連載するようになった。そしてファッションデザインコンテストもよく行われるようになった。例えば『中国婦女』は1987、1988年に「読者ファッションデザインコンテスト」を行い、大きな反響を呼んだ。『中国青年報』（1986年7月18日、第3版）も北京で行われたファッションデザインコンテストを報道した。

- (21) 「中国選美透視」『心理世界』1994年第1期、「美女成災——選美氾濫之惑」『經紀人』2005年第2期
- (22) 龍軍（2013）「掲密内地選美經濟」『东西南北』2013年第16期：54-55
- (23) 陳煜、錢躍（2008）「女部长的“裙子門”風波」『民間記憶 1978-2008』中央文獻出版社：83
- (24) 「外国マスメディアは中国の“身長差別”に関する見解：身体商品化の普遍化」（原題：外媒看中国“身高歧视”：身体商品化已变得普遍）
<http://www.cankaoxiaoxi.com/china/20151118/1000536.shtml>
2018年8月5日アクセス
- (25) 周偉（2008）「わが国の市・鎮就業における外見差別問題研究」（原題：我国城镇就业中的长相歧视研究）『政法論叢』2008年第4期：2-11
- (26) 尚鳴、張丹（1992）「时装表演走向世界」『今日中国』（中文版）1992年5期
- (27) 「夫妻運動快樂器」の広告は、『中国婦女』1989年第7期表3に掲載されている。
- (28) 鄭舍（1986）「留学熱およびこれに関する論争」（原題：留学热以及由此产生的争论）『今日中国』（中文版）1986年第10期
- (29) 『大衆電影』1987年第1期では、女優の海外流出問題が1986年中国映画界の10大ニュースの一つとして選ばれた。
- (30) 顧曉鷗（1988）「表紙の効果——脱ぐ、あるいは脱がない」（原題：封面照效应——脱，还是不脱）『大衆電影』1988年第3期：4-5

引用・参考文献

- ブリュノ・デュ・ロゼル 1995『20世紀モード史』西村愛子訳 平凡社：336
- 方之光、龔雲 2000『农民运动史话』社会科学文献出版社：408
- 北村文 2017「ジェンダーをやる－逸れる、盛る、かき乱すファッション」藤田結子、成実弘至、辻泉編『ファッションで社会学する』有斐閣：111-127
- 李子雲、陳惠芬、成平編著 2009『チャイナ・ガールの1世紀－女性たちの写真が語るもう一つの中国史』三元社：214
- 李道新「『大衆電影』と新中国民衆の日常生活」（原題：『大衆電影』与新中国民衆の日常生活）『華中學術』2009年第2期：225-237
- 劉仰東 2004『紅底金字 六七十年代的北京孩子』中国青年出版社：279
- 彭偉文 2008「『姑蘇繁華図』における女性の世界」『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集』神奈川県立大学 21世紀 COE プログラム：53-72
- シャルル・メイエール 1995『中国女性の歴史』辻由美訳 白水社：230
- スーザン・マン 2015『性からよむ中国史：男女隔離・纏足・同性愛』小浜正子、リンダ・グローブ監訳、秋山洋子、板橋曉子、大橋史恵訳 平凡社：118、132
- 竹内理樺 2007「立ち上がった女たち」関西中国女性史研究会編『中国女性史入門・女たちの今と昔』初版第3刷 人文書院：65-66
- 王向賢 2004「知識、主体性と根据地婦女運動——以抗戰時期的晋察冀邊区為案例」
- 杜芳琴、王政主編『社会性別』第2輯 天津人民出版社：61-83
- 王瑾著 2011『現代中国の消費文化——ブランディング・広告・メディア』松浦良高訳

岩波書店:47

徐華龍 2010『上海服装文化史』東方出版中心:298

謝黎 2004『チャイナドレスをまとう女性たち——旗袍にみる中国の近・現代』青弓社:100

謝克 1946『延安10年』上海青年出版社:66

尹丛丛 2014『『大衆電影』復刊:当“老文芸”遇上“新土豪”』『齊魯週刊』2014 第1期:40-42

図版出典

図1 ソランジュ・ブラン 2012『北京1966/フランス女性が見た文化大革命』下澤和義・土屋昌明編訳 勉誠出版 第20枚写真より引用

図13 紀元前221年秦朝から20世紀初期清朝の女性着装

<https://kknews.cc/zh-cn/history/lxalx5e.html>より引用 2018年5月3日アクセス

図14 李子雲、陳惠芬、成平編著(2009)『チャイナ・ガールの1世紀』三元社:第79、80、89ページより引用(左から右へ)

図15 李子雲、陳惠芬、成平編著(2009)『チャイナ・ガールの1世紀』三元社:第56、87ページより引用(左から右へ)

図16 原図は1932年8月7日付『申報』に掲載、謝黎(2004)『チャイナドレスをまとう女性たち——旗袍にみる中国の近・現代』青弓社:100より転用

図17 「公園で「斬裾」をしている陶星兒」はyou tube上の映画『街上流行紅裙子』の映像をスクリーンショットを撮って引用

図18 「水かけ祭り—生命の賛歌」は<http://www.chinanews.com/special/guoqing/60/2009/07-09/376.shtml>より引用 2018年5月15日アクセス

図19 (左)『中国婦女』1985年第4期、(右)第6期より引用

図20 『中国婦女』1985年第3期より引用

図21 『中国婦女』1985年第5期より引用

図22 『大衆電影』1987年第1期より引用